

此鳥も近在にて産巢する也、外鳥よりは子早く出来る也、飼方鈔にて八分餌なり、

朝鮮百舌

此鳥近在にて産巢すれ共、是はおそし、入道よりも拂底なる鳥也、餌飼右同斷、

島百舌

此鳥近在にて産巢すれ共、是もおそし、頭淺黄なるは雄也、此百舌の類、人々知る處故、委しく記さず、餌飼同斷、

大百舌

此鳥上方よりま、江戸來る也、大さ尾長鳥程有、拂底なる鳥也、江戸にて取たる事覺なし、餌飼鈔にてどう返し、

鷓事蹟

〔日本書紀<sup>仁德</sup>〕六十七年十月甲申、幸河内石津原、以定陵地、丁酉、始築陵、是日有鹿、忽起野中、走之、人役民之中而仆死、時異、其忽死、以探其瘡、即百舌鳥自耳出之、飛去、因視耳中、悉咋割剝、故號其處曰百舌耳原者、其是之緣也、

〔吾妻鏡<sup>十八</sup>〕元久三年<sup>○建永元年</sup>三月十二日癸巳、櫻井五郎<sup>信濃國住人</sup>殊鷹飼也、而今日於將軍<sup>源朝</sup>御前、

飼鷹口傳故實等申之、頗及自讚、加之以鷓、如鷹號、可令取鳥云云、可覽其證之由、直雖被仰、於當座難治、可爲後日之由辭申之、十三日甲午、相州依召參御所給、數刻及御雜談、將軍家仰云、有櫻井五郎

者、以鷓可令取鳥之由申之、慥欲見其實、是似嬰兒之戲、無詮事歟云云、相州被申云、齊賴專此術云云、於末代者希有事也、絳若爲虛誕者彼不便、猶以內々可被尋仰者、此御詞未訖、櫻井五郎參入、著紺直

垂、付餌袋於右腰、居鷓一羽於左手、相州自簾中見之、頗入興、此上者早可有御覽云云、仍被上御簾、及此時、大官令問注所入道已上群參、櫻井候庭上、黃雀在草中、合鷓<sup>三寄</sup>取之畢、上下感嘆甚、櫻井申云、

小鳥者尋常事也、雖雉不可有相違云云、即被召御前、簀子賜御劔、相州傳之給云云、